ずぐりの世界

本冊子は制作者・工藤様のご了解を得て公開しております。

はじめに

私は１９７５年頃から「こけし」に不思議な魅力を感じていました。丸い頭、子どものような愛らしい顔、細長い胴、よく見ると手も足も無いシンプルな人形の胴に絵付けをしただけの木製人形です。

当時、友人に誘われて奥瀬鉄則さん宅を訪れ、次いで盛秀太郎翁一家に紹介されたことから「こけし」への関わりが始まり、黒石市民の会員で組織している「津軽こけし会」に加入することとなりました。この会は年に１～２回東北のこけし工人を訪問し、情報交換のほか好みの「こけし」を入手することが目的です。

奥瀬鉄則さんが盛秀さんの弟子時代、『全国こけしコンクールへ師匠の展示品と販売用の「こけし」を、夜行列車に乗って鳴子温泉まで持って出かけるが、帰りの荷物は出発前とほとんど変わらず、寂しさがこみ上げてきて、黒石が非常に遠かった。』としみじみ語ってくれたのを今でも忘れることができません。

その後、棟方志功氏が盛秀太郎さんのこけしは「日本一のこけし」と評してから、全国から注文が殺到するようになり、これを受けて「盛秀こけし」を後世に残そうと地元山形地区の皆さんが、こけし史料館建設の計画を立てています。その実現に向けて数年に亘り全国のこけし収集の旅が始まり、目標の３，０００本を収集したのを機に市へ寄贈し、「津軽こけし館」の建設を成し遂げました。建物の名称を何にするか、「こけし史料館」、「盛秀資料館」など幾つかの案が出され、最終的に「津軽こけし館」に決まり、津軽の伝統こけし等の拠点施設として、重要な役割を担っています。

近年、私が持っているこけしを整理していたら、数個の「ずぐり」が出てきました。その「ずぐり」を見て、幼い頃雪の上で寒さも忘れ、ずぐり回しをして遊んだ思い出が蘇ってきました。と同時に、幾つかの疑問に悩まされることになりました。これまで長年にわたり全国のこけし工人宅を訪問していましたが、不思議なことに「ずぐり」に似たような

独楽を作っているのを一度も見たことがありません。

こけしより先に作られていたという「ずぐり」は、津軽地方独特の木製独楽ですが、いつ、誰が最初に考案したのだろう。どこから津軽へ伝えられたのだろう。現在、津軽のほかにどこで作られているのだろう。「ずぐり」の名称に、いつ統一されたのだろう。いろいろ思いを巡らせるが、確かな文献にもたどり着かず、時間だけが過ぎていきました。

全国各地に、回転する独楽は数多く存在する中で、「ずぐり」によく似た独楽が「博多独楽」です。日本で初めて木製のすり鉢の台に、鉄の芯を使用してよく回るよう工夫された独楽で、１７世紀後半に生まれた単純な回転を求めるのでなく、相手の独楽に叩きつける「ケンカ独楽」として競う遊びが、全国に広がったと言われています。

福岡市内にある龍宮寺の山門に「旧上小山町」と刻まれた石碑がありますが、ここに「日本の独楽発祥の地」と書かれ、この博多独楽の軸である金属部分を、雪国で使えるよう木製のすり鉢型の下にコブのような丸い軸に改良したのが「ずぐり」ではないかと推量しています。

（博多独楽）

明治、大正時代の「ずぐり」は子どもの遊び道具として、また、湯治客のみやげとして盛んに製造されましたが、昭和のバブル期には、伝統こけしが爆発的人気を得たことから価格も高騰し、「ずぐり」はしだいに姿を消すようになりました。しかし「ずぐり」は冬の遊び道具として、年齢を問わず今もなお現役で活躍しており、見て美しさを感じ、華やかさを感じ、回して楽しさを感ずる津軽の独楽は、今後も津軽の良き伝統工芸品として次世代へ引き継がれていくことと思います。

現在の書物の中から「ずぐり」に関する部分などを拾い集めてみましたが、全体的な文章からすると整合性の取れない部分があり、名称一つとってもいくつもの見解があり、これが正しいと言い切れないことから、今後新たな文献等が発見され、さらに正しいルーツなどが解明されることを望んでいます。

もくじ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
独楽の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
木地師・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
ロクロの歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
「ずぐり」の名称 ・・ ・・・・・・・・・・・・・・・・１０
「ずぐり」の用材・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
彩色の材料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
「ずぐり」の種類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
盛秀手帳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
遊び方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
ずぐり回し大会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
教材・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
嫁ぐずぐりへの想い(Ｑ＆Ａ) ・・・・・・・・・・・・・２１
武士の商法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
津軽系こけし工人系図・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
縄の綯い方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
工人別写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

独楽の歴史

独楽は極めて古い歴史を持っています。世界最古の独楽は、古代エジプトの遺跡から発見されたもので円錐形をしていて、紀元前２０００～１４００年ごろのものと考えられていますが、エジプトだけでなくインダス文明やギリシャ文明など、世界中の古代遺跡からも多数の独楽が発見されています。

日本でもっとも古い独楽は、７世紀に平城京跡や奈良県藤原宮跡から見つかったぶちゴマ(叩きゴマともいい、鞭のようなもので、独楽を叩いて回す)で、回転軸が定まりやすいよう、先端が細く突起した形状をしています。独楽は、唐時代に中国から朝鮮半島を経て日本に渡来し、奈良時代初期に朝廷行事の余興として用いられ、平安時代には貴族の遊戯へと変わり、しだいに民間の子どもの遊び道具に移行していきました。

「コマ」という名前が確認できる最も古い記述は、平安時代中期の１０世紀前半に作られた辞書『和名抄』に見られ、「古末都玖利(こまつぐり)」というもので、「古末」は朝鮮半島の高麗から伝来したことから「高麗(こま)」とも書きました。「都玖利(つぐり)」とは円の意味で、これが独楽本来の名称となり、「ツグムリ」とも言われていました。大陸から伝わったこのタイプの「古末都玖利」には穴が開いており、回すと「うなる音」がする鳴りゴマであったと考えられています。『和名抄』での独楽は、雑芸具(遊具)に分類されていますが、古代日本の独楽は、多くの場合遊興のためでなく、神仏会や相撲節義の際の吉兆を占う道具として用いられました。儀式の際には、独楽びょう師と呼ばれる専門の占い師が、独楽のうなる音で吉兆を占ったり、その音で悪魔祓いをしたともいわれています。また、庶民の遊びとしての「コマ」を記した文献は、南北朝時代の１４世紀に書かれた『太平記』の中に「コマ廻シテ遊ケル童」という記述が見られ、初めて名称で「コマ」という言葉が単独で登場します。これは「こまつぐり」とか「こまつぶり」の最初の２文字をとったわけですが、「コマ」の方を略す呼び方もあります。

江戸時代に入ると、独楽の神儀性が薄れ広く庶民の遊び道具となって、さまざまな種類の独楽が登場してきます。手回し、鞭で叩いて回すもの、あるいは変形の手車(ヨーヨーに似たもの)、輪鼓(りゅうご)、 鼓(つつみ)ごま、デアボロなどが存在し、それぞれの形によって遊び方も多様化され、子どもの遊びのほかに賭事や見せ物興行として流行しました。同時に風俗的な弊害(賭博遊行為や独楽回しを職とする者の売色)も生じた理由から、独楽の販売、使用の禁令もしばしば発せられましたが、現在も伝承的な作品は郷土玩具として全国各地にみられます。

(江戸時代のコマ遊び)

※神仏会とは、大勢の人が寄り集まって行う神事や仏教の行事。

※相撲節儀とは、相撲は現在では単なる職業的興行物と考えられているが、本来は神事と関係深いものだった。宮廷では初秋の行事として相撲節儀が行なわれた。

木地師

木地師とは、山林などの木を伐採しその材料を荒取加工し、ロクロなどを用いてお盆やお椀・日用で使う器を作る人のことで、ロクロ師とも呼ばれ、ずぐり作りには、この木地師(木地屋)・ロクロ師といわれる職人達が関わったことに間違いありません。

※ロクロ師という名称の方がより適当な場合もあるが、ロクロ師という場合、陶器ロクロと混同されることもあるので、それを避けるため木地師という呼称を今回使用することにした。

木地師の始まりは、９世紀に木地師の祖とされる文徳天皇の第一皇子惟喬親王(これたかしんのう)が、君ヶ畑(現在の滋賀県東近江市君ヶ畑)へ隠棲(いんせい)し、周辺の杣人(そまびと)に木工技術を伝授したことから始まり、日本各地に伝わったといわれて

います。遠刈田新地などの木地師ゆかりの地には、惟喬親王を祀る神社が今も存在しています。

木地師の発祥地とされる君ケ畑と蛭谷の本家二派は、それぞれ木地師・ロクロ師と別箇の呼び方をして対抗していましたが、文政八年（１８２５）の「君ケ畑文書」によると、両者はもともと同一のものであり、蛭谷・君ヶ畑近辺の社寺に残っていた「氏子狩帳」などの資料から木地師の調査・研究が進められました。近江には、樹材が無いわけでもないのに木地師達が、日本全国の山中に進出し、わが国山村の大部分を構成していった「山の民」です。九州や東北などの辺地な山間地に住みつき、幾代が過ぎても近江の社寺を本所として故郷として慕い、自らには戒律を課して仕事に励んできた一種の職業党的な集団です。その彼らが故郷を離れ仲間と別れて、なぜ寒冷の奥羽山中に入ったのか未だ不明ですが、こけし製作に携わった木地師群がわりあい多く、東北地方の温泉地帯に集まっている現象については、近江人という暖地民族は、東北山地は寒冷気候のため、避寒的に移動したのが一因と考えられています。加えて経済不況の時期に生産品が売れ行き不振となり、生計困難な集団が生じ、これらの中には玩具土産物産屋とし温泉地帯に集合してきた木地師たちの一群も発見されています。すなわち健康保全のための問題と、木工製品の売行不振の経済的な面が背景にあります。この裏付けとなる資料『氏子駈帳』の記録によると、老人婦女子たちが東北の寒冷気象に耐え切れず、帰郷を切望する者も現れたほか、木工素地の売行不況のため困り果てている状態が公文所宛へしばしば報告されています。

東北地方の寒冷もさることながら、東北弁への理解についても多大な不自由さを感じたことであったと思います。しかし、やがて長年の間に寒さにも慣れ、言葉も東北弁に変わっていくことで、流転は終焉を迎え、それぞれが東北人になりきり、故国時代の神事も忘れ果て、数百年の歳月の経過で北国人になりきってしまっても不思議はありません。

大鰐の村井福太郎翁の話によると、大鰐の木地屋は、江戸時代から明治にかけて、津軽藩主の庇護を受け澤田、間宮、田中、村井、油川、横

山、苗字不詳の７軒の木地屋があったのですが、明治になるに及んで間宮と村井家のみが残り、他は転廃業してしまったそうです。

歴史的には温湯系の木地屋より古く、藩の庇護がなくなって、もっぱら温泉客みやげの茶入れ、盆、煙草入れ、木地玩具などを作り、大正期に入ると、温湯系の木地屋や、鳴子の木地屋とも技術交流をしたとも伝えられています。

温湯木地師については非近江系であり、次の斉藤幸兵衛、盛与七、毛利与七、耗利丑蔵、盛末太郎、佐藤伊太郎、佐藤久太郎、佐々木金助、島津彦蔵の９軒の家々が、明治時代に至るまで存在したと盛秀太郎翁から教えてもらいました。

「木地師と木形子」(杉本壽著)によると、旧山形村板留温泉や温湯温泉の人々が、板留時代以降「ぢぐり狗」・「いじこ」・「じょうば」・「子持狗」などの木地玩具のほかに、現在の「こけし」らしいものを、温泉みやげとして販売したのが、大正末期ころだといわれています。

「オモチャ■コ」(北彰介著)の中で、弘前市の民族研究家である木村玄三氏が、温湯こけしについて次のような見解を述べています。「民俗学を掘り下げていくにはやはり郷土史というものをおろそかにできない。津軽為信が津軽平定の時、今の山形県にいた最上家から武器の援助を受けたが、後に徳川家によって最上家が断絶された時、最上家の家臣たちが大挙津軽へ来た。おそらく為信が以前の恩義に向いたものと思われる。そして最上家の家臣達を板留、温湯方面に居住させたことにより、山形の村の名もそこから由来する。その時家臣と一緒に木地師も来たが、木地師はこけしの技術を持って来たわけである。したがって、温湯こけしは蔵王の系統であると考えるのが妥当である。」

※温湯こけしについては、盛秀手帳(15ページ)に記載されていますが、盛秀さんが初めて創作し温湯系こけしが誕生しました。よって、蔵王の系統とは別個のものです。

昔の木地屋と今の木地屋(木地師)の仕事は大きく様変わりしました。昔の木地屋は柄杓、杓子などの製品を作っていましたが、その材料は「みずき」などが主に使われ、旧山形村の木地屋はその原木の大部分を沖浦

の奥あたりの山から伐りだし、営林署から払い下げを受けています。

盛秀さんが伐採のため山に入るのは寒の厳しい１月から２月頃で、伐採する山に近いヤマコ(杣人)を伴い、山の中に小屋掛けし、何日も小屋で寝泊まりして伐採しますが、木の長さは６尺の小切りにしながら橇で川岸に出して積んで置き、５月から６月の雪解けの季節に再び山に入り川に流したそうです。

盛秀さんの時代は、温湯の木地屋がヤマコを頼んで５軒共同でこの川流しをやり、長柄の鉤をそれぞれ持って流し木と一緒に川を下りました。流し木は、川岸に引っかかると川に入って鉤でひっかけて流水に放ちますが、川は雪解けで増水しているため、危険なうえ重労働であったといいます。沖浦で川流しをすると、１０km ほど下流の温湯の土場に流れ着くまで丸１日かかり、流れ着いた材木はヤマコが鉤で川岸へ引き揚げ、払い下げを受けた５軒の木地屋は五等分して５つの山に積みます。五等分したといっても目加減で分けることから木の質まで均等にならないので、ワラを長短にちぎって５軒の木地屋はクジを引き、クジに勝った者から木の山を選んで運び、２年ほど「寝かせて」から木地を挽いた。

奥瀬鉄則さんが弟子入りした翌年(昭和３０年)の１月末、営林署から払い下げを受ける木を伐りだすため、ヤマコと一緒に沖浦の山の中へ入って行きました。温湯からは奥瀬さんなどの木地師が行き、一番年下の奥瀬さんは１６歳であったといいます。

１週間ほど山ごもりするので、なるべく風の当たらない川岸に小屋がけをします。小屋といっても丸太を組んで周りをムシロで囲っただけのそまつなものですが、小屋の周りには雪が１m 以上も積もります。

米、味噌、醤油など食料を持参して、小屋の真ん中にカマドを作ってそこで煮炊きし、夜はランプの明かりで食事をします。ヤマコはウサギの通る道を知っているので、ククシ(わな)を仕掛けてウサギをとったり、鉄砲でウサギやキジを撃ったりして、それを料理して食べることもあったそうです。寝るときは、仕事着を着たまま毛布をかぶってカマドの周りでゴロ寝をします。ムシロの隙間から風が吹き込むし、吹雪ともなれば小屋の中に雪が舞い込み、ムシロが板みたいにバリバリに凍っている日もありました。

伐採した木は荒縄でしばって長さ６尺、幅４尺の橇二台並べた上に積んで沢づたいに山を下り、大通りまで運び出します。小枝のほうは炭とかマキになりますが、太い幹の方は木地屋がもらい受けていました。奥瀬さんは大通りの道端に積んでおいて、雪解けを待ってトラックで運んだが、この時代には川流しはしていなかったそうです。

奥瀬さんがヤマコと一緒に冬山に入ったのはこの１回きりですが、吹きさらしの掘立小屋で寝泊りする仕事は、想像を絶するほど困難なものであったといいます。現在はトラックで業者が木地屋まで運んでくれるため、木地屋がヤマコと一緒に冬山に入ることもなくなりました。

また、盛秀さんの仕事場は、木取りや描彩をする部屋があり、その奥の中央にはロクロが据え付けられて、ここで木地を挽いていましたが、この部屋の隅に鍛冶もやれるよう、フイゴ(手で動かして風を送る鍛冶道具)や金床が置かれていました。

木地師は自分で使うカンナは自分で作るのが鉄則とされ、荒削り用、木掘り用、仕上げ用など用途に応じて数種類のカンナを必要とし、当時の木地師は、鍛冶もやれないと一人前といえず、鋼の見分け方、鍛え方、ヤキの入れ方を覚えることは技術の内といわれ、師匠を見習って覚えますが、切れ味の良いカンナを作ることが木地師の自慢であったようです。

(カンナ)

盛秀さんが元気なころは弘前や黒石へ出かけた際に鋼材屋へ寄って、鋼と鉄棒を買い求め、自分に合った、使い勝手の良いカンナを作っていましたが、盛秀さんの孫の美津雄さんが言うには、ジサマは体が弱ってからは鍛冶をやることはなく、鍛冶屋へ依頼するようになったそうです。美津雄さんの時代になって仕事場を改築し、鍛冶を行う場所はなくなりましたが、ロクロの片隅で時代を見続けてきたフイゴが今も置かれています。

ロクロの歴史

木地挽を惟喬親王が奨励したロクロは、二人挽きから始まり時代が進むにつれて、足踏み、電動へと進化してきました。

木工品を作る道具はロクロとカンナです。木工ロクロは粗い円柱状に成形するため、用材の片側の底を機械の軸の先についた爪等で固定し、軸(心棒)を回転させながら、棒状のカンナの刃を当てて、用材の表面を削る装置です。軸を回転させるための動力で、最初に登場したのが二人挽きによる綱引きで、綱を持つ方を綱取り、または綱引きといい、刃物で挽く方を鉋取りといいますが、綱取りと鉋取りが必要です。

明治になっての足踏みロクロが普及するまで、１０００年以上の長きに亘り使用され、その後の明治中期ごろまでには、全国的に能率のよい足踏みロクロの一人挽きに入れ替わり、戦後になると電気のコストが下がったことから電動ロクロに移行し、生産効率や製品の仕上がりにも変化を及ぼしました。

(二人挽きロクロ)

(足踏みロクロ)

(電動ロクロ)

「ずぐり」の名称

東北地方では明治、大正前期ごろまで「ずぐり」「すぐり」「ずんぐり」「じぐり」などと呼ばれていましたが、津軽地方特有の「ずぐり」は大鰐町や温湯温泉などの木地師が作ったものが多く、すり鉢型の木製独楽

で「地繰り」とも書きますが、その形状から見て「頭繰り」の方がふさわしいという説など諸説あるなかで、青森県で教師を勤めるかたわら、長年に亘り津軽の言葉を調査・研究し、方言辞典にして百科事典の「津軽のことば」(正続２０巻)を刊行した鳴海助一氏の「ずぐり」に対する考察によれば、丸木の「筒切り」「直切り」から来たものではないかという。木地をくり抜くという意味と、またその切り方とその形が短く太いぶつっとしていることから「ズンギリ」という意味もあるのではないかと指摘しています。(正編第５巻)

津軽地方では、「ずぐり」「すぐり」「ずんぐり」「じぐり」「づぐり」などと呼ばれていましたが、南部地方でも「ずんぐりごま」と呼び方は大体同じですが、現在は津軽地方の大方は「ずぐり」に統一されています。一部の地域では「づぐり」を使用しているところもありますが、「ずぐり」という名称になった理由と時期もはっきりしていません。

日本専売公社が、たばこのロングホープ２０本入のパッケージに「青森県のずぐりごま」をデザインし、販売していたことを知り、「たばこと塩の博物館」へ問い合わせたところ、昭和４２年１２月１日に全国の主要都市で発売されたもので、当時５種類のこまシリーズで「意匠替えたばこ」として発売し、青森県の「ずぐり」はその１つであり、他の４種は神奈川県の大山こま、長崎県の佐世保こま、鳴子のだるまごま、三重県の竹鳴りごまで、デザインは斎藤明宏氏とのことです。

(ロングホープのパッケージ)

また、津軽の「ずぐり」によく似た「ずんぐり」が、鳴子温泉、遠刈田、弥治郎の一部で製作されており、その歴史を知るため、関係者等へ問い合せたのですが、今、製作している人でも詳しいことを知らないとのことから、古くから付き合いのある鳴子のこけし工人、高橋正吾さんに問い合わせたところ、正吾さんの父が木地師であったことから、正吾さんも若い時父の元で木地師の修行をし、今日に至っていますが、『父

の時代も、私の若い頃にも「ずんぐり」という物はなかった。昔の鳴子のこまは鍛冶屋が先に外側の枠を作り、木地師はその中に入る木製部分を作ったものに、真ん中に金の芯棒をつけた「投げごま」であった。「ずんぐり」の歴史はそんなに古いものではなく、近年「日本こけし館」で見ている。津軽の「ずぐり」は、鳴子の「ずんぐり」より先に作られており、「ずぐり」は古い歴史がありますよ。』とのお話を伺いました。

「ずぐり」の用材

「ずぐり」はどんな木材でも作れるが、こけしの材料と同じで、イタヤ、ミズキが主に使われるそうです。イタヤは、肌目が細かく、ミズキより材質が堅く重いほか、古くなるほど褐色が濃くなり、飴色を帯びて重厚な感じと気品を生じてくるのと、材質が硬いので割れにくく長く使えますが、木材が完全に乾燥しないまま「ずぐり」を作ると、時が経つにつれて変形し、うまく回らなくなるので完全に乾燥するには2～3年必要とします。

ミズキは、白色系で肌目が細かく柔らかい、その上乾燥すると軽量になるが、木の捻れが少ないことから、軸がブレないのでよく回るともいわれています。また、ミズキの木目が目立たないのでこけしに適した木で、保存方法がよければ雪国の女性の肌白いキメの細かいローカルカラーを永遠に温存できます。加工しやすいのも特徴の一つです。

彩色の材料

今使われている色の材料については、「ずぐり」も「こけし」も同じ

材料を使いますが、昔、ねぷたに使用した色からヒントを得て使い始めた色が染料です。その当時は、青竹(青色)、スカーレット(赤色)、オーラミン(黄色)の三色で、これをいろいろ配合し複雑な色彩を作り出して使っていました。その後ヨーシン(朱色)、イワムラ(紫色)が加わり五色になり、さらにカラフルな色彩が見られるようになりました。

なぜ染料を使うのか、それは木の肌目にいろいろの色彩の染料を使って色付けすると、あたかも染付たような効果が得られ、顔料では絶対出せない色彩だそうです。ただし、染料は長時間光にあたると色落ちするのが欠点です。

「ずぐり」の種類

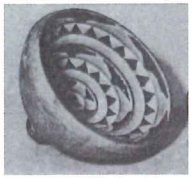
青森県の津軽地方の独楽、すなわち「ずぐり」の特長は軸らしい軸を持たず「すり鉢型」がほとんどですが、すり鉢の下にコブのような軸がちょこっと飛び出していて、いかにも愛嬌がある形ですが、雪の上でも回せるよう工夫された独楽で、すり鉢型の中は段々になっており赤、青、黄、紫などに彩色され、独特な素朴さと華やかさを持っています。

「ずぐり」の種類は多く『すり鉢ずぐり、皿ずぐり、かぶずぐり、二重(二段・二階ともいう)ずぐり、三重(三段・三階ともいう)ずぐり、小さいものとして豆ずぐり』などがあります。青森師範学校発行「郷土号」第一号に菅沼貴一氏の「青森県の方言」が載っていますが、そのなかに「ずぐり」の種類を『カブずぐり、ニケエずぐり、三ケエずぐり、タケずぐり、コマずぐり、ガッパずぐり』と記されています。この他、一般的なコマの形をしていたものには、一文銭の穴に棒を差し込んである「一文銭ずぐり(銭ごま)」、鉄の輪をかけた「金輪ずぐり」、鉄の心棒のついた「かねたずぐり」も掲載されています。

青森県内でも津軽と南部では違いがあり、津軽の「ずぐり」は木製で

すが、南部の「ずぐりごま」はいわゆる「貝(ばい)ごま」の種類になります。貝ごまは巻貝の形に模して、木や鉄で作ったもので心棒はありません。もとは、巻貝の殻に溶かした鉛を流し込み、重みをつけて勢いよく回るように工夫したといいます。

模様・彩色の特長として、明治期の「ずぐり」にはいわゆる「ウロコ模様」という手の込んだ模様をほどこしていましたが、時代が下って昭和の頃となると、一段一段を同一色で塗りつぶした彩色法による「ずぐり」が出現しました。木村弦三氏は、このウロコ模様のずぐりについて『すり鉢ずぐりの特色のあるのは、内部に模様を持つのは温湯系である。すり鉢型の中心から広がっている各点描模様のハーモニーの豊かさは、各地の独楽にもその類をみない』と書き残しています。


(ウロコ模様)

盛秀太郎翁の「ずぐり」は、ウロコ模様から更に美を求めてウロコ模様を残しながら、花模様のような見て美しく、回転によって生まれる綺麗な模様に進化させてきました。温湯系のこけし工人さん達は、それを今も継承し作り続けてきたといえましょう。

一方、大鰐系の「ずぐり」にはウロコ模様のようなものは全く見られず、特徴はすり鉢型の内側の段々ごとに同一色で塗りつぶした色彩を何種類かを使ったロクロ模様が特徴で、内側の段々が温湯系より浅く作られており、佐々木金次郎氏の「ずぐり」にもこのウロコ模様は見あたりません。

「ずぐり」を作るこけし工人は、考案者の作品を勝手に真似て作ることはできません。「ずぐり」や「こけし」は、長年に亘り研究の積み重ねの結果で、独自の工法や色彩・形状・模様が完成されています。それを後継者が引き継ぎ、更に進化させ次世代へと継承されていくことが伝統と言うことであるとすれば、ウロコ模様を最初に考案した盛秀太郎翁の特許みたいなものであろうと考えるのが妥当ではないでしょうか。

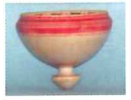
その後まもなくすると、本田功工人(現在栃木県在住)から連絡があり、「ずぐり」の話をしている中で、これらのことを裏付けるようなことを

聞かされました。彼の話では、本田さんが若い頃盛秀太郎さん宅を訪れ、「ずぐり」の作り方を教えて欲しいとお願いしたところ、盛秀さんは「本当に覚える気があるのなら、大鰐の佐々木の所へ行け」といわれたそうです。その時の話の中で盛秀さんがいうには、『「ずぐり」のウロコ模様は私がこぎん刺しからヒントを得て作ったものだ。』と話してくれ、盛秀さんが作ってくれた「ずぐり」の裏に名を入れていただき、それを持ち帰って手本にしていましたが、いつの間にか私の手元にはその「ずぐり」がなくなってしまいました。と思い出深そうに笑いながら話してくれました。

「ずぐり」の大きさについては、私が持っている一番小さい豆ずぐりは直径２．３cm ですが、阿保六知秀工人によると、大きさの決まりはないが、近年、競技に使用されているのは、８cm から１０cm 程度だとされています。また、飾り用に直径２０cm や２５cm の大きな注文もあるそうです。

(豆ずぐり)

(皿ずぐり)


(すり鉢ずぐり)

(かぶずぐり)

(二重ずぐり)

(三重ずぐり)

盛秀手帳

盛秀太郎は明治２８年１１月２８日、盛与吉の長男として生まれ、明治４４年郡立農学校に進んだ後、父与吉のもとで木地挽きの修行を始めました。

大正３年の春、温湯を訪れた宮城県佐沼出身の佐々木芳男氏に「こけしを作ったらどうか」と話があり、「頭と胴だけで手も足もない木人形だ」と教えられたが、見たこともない「こけし」というものを盛秀さんは暗中模索の中、形や模様を創作しながら、盛秀型こけしを作り出して

きました。これが温湯こけしの誕生です。

盛秀さんが書き残した手帳は今も盛家に残されておりますが、表紙には「元祖　盛秀こけし」と書かれ、こけしの始まりがよくわかります。

初めてこけしを作った翌年、大正４年の手帳によると、「種々のものを製作して温湯温泉浴客に販売し、冬期は付近の市場に専から杓子、柄杓子等を製作し卸売せしも販路せまくて需要至って少なし。・・・・」

温湯の木地屋は、明治維新までは生活も楽であったが、この手帖によると大正時代に入り、苦しい時代を迎えなければならなかったようです。

その当時の製作品と価格が記されています。

杓子卸値(大)	２５銭
杓子卸値(中)	２３銭
杓子卸値(小)	２０銭
柄杓子卸値(４寸５分)	１円
柄杓子卸値(４寸)	８０銭
燭台小売(２尺５寸　２ケ)	３円５０銭
燭台小売(２尺　２ケ)	２円５０銭
燭台小売(１尺５寸　２ケ)	２円
燭台小売(１尺３寸　２ケ)	１円２０銭
地繰小売(４寸)	１０銭
地繰小売(３寸５分)	８銭
地繰小売(３寸)	５銭
碁石入(２ケ)	１円
こけし(８寸５分)	１０銭
こけし(７寸)	８銭
こけし(５寸５分)	６銭
こけし(４寸)	４銭
こけし(３寸)	３銭

こけしを創作しはじめた翌年、こけしを販売しています。この時代の米の価格は１俵約１０円、１週間の湯治代が２円５０銭くらいです。

遊び方

『「ジンジンずぐり回しぶっつけ、デカ法度。一、二、三」雪にどっかり座り、ずぐりの側面で雪をてかてかに光るまでこすりつけて「ナベ」をつくり、勢いよくずぐりを回して競争したものである。』これは青森の歌謡詩「手風琴」に幼い頃の思い出を随想風につづった工藤博信氏の「ずぐり」の一部分です。

「ずぐり」を回して遊ぶことを「ずぐりまわし」とも「ずぐりぶつけ」ともいっていました。「ずぐり」の勝負のつけ方には二種類あり、一つは「ずぐり」のすわりを競うやり方(最後まで回転してころばない)と、相手のずぐりを一定の場所からはねつけて出すやり方です。回し方にも二種類あって、縄を手前に引いて回す「引き」と、向こうへ投げつけて回す「投げ」があります。

「ずぐり」をよく回転させるには先ほども少し触れましたが、ずぐりの側面で雪を丹念にこすり、ぴかぴかに光らせます。これを黒石方面では「しみどこ」(凍処の意か)、青森方面では「へねどこ」、弘前方面では「バンコ」と呼び、ここにずぐりを回し入れます。現在黒石では「しみどこ」でなく「バンコ」に統一されています。

ずぐりを回す縄の素材は、たいていワラで「左巻き」に綯ったものですが、弘前地方では麻縄で縄を綯うそうです。根元の方は太く先端の方へとしだいに細くしていきます。これをずぐりの側面に下方の「タッコ」(弘前)「へチョコ」(青森)と呼ぶ下軸から上へ上へと巻いて、勢いよく投げ出し、この時縄を強く引くのがうまく回すコツです。

「すわり」(青森では「まわし」といった)で早く倒れたもの、または１つの枠の中や、同一の「しみどこ」に２つの「ずぐり」を入れて一方をはじき出す「はつけ」(はじき出すの意)(青森)ではじき出されて敗けた者の「ずぐり」は、参加者全員にぶっつけられます。「ずぐり」を逆さにして、茶碗をぶっつけるようにありったけの力でぶっつけられるのですから、「ずぐり」の木質の良くないものは真っ二つに割れてしまい

ます。そのため、子どもたちは割れない「ずぐり」を買うため、色々と研究していました。「ずぐり」の裏の方から力強く息で圧し、表面に泡が立つのが割れないとされています。

「ずぐり」に高度な回転がかかり、静止したように見える状態を「寝る」といい回転時間が長く、よく回らないでブルブルと振動するのを「ネジつくる」といいます。また「すわり」の競争時、だんだんゆっくり回ってくると、縄の先端でずぐりの先をたたいて回転を長く保たせようともした。そこでこの競争の時には「ただぎなんこ」（たたくのは無いことの意）とか、「ただぎいっこ」（たたくのはよいことの意）とか、ルールをはっきりさせてから行っていました。また、タッコ[illegible](軸)は平たい方がよく回るといわれていました。

「ずぐり」を回す時は、「ハーオェッ」と掛け声をかけたそうですが、その後「ハーシ、ハーシ、ハーシッシノシ」（黒石方面）「オインチァ、オインチァ、オインチ二」（青森方面）と声を出して回すようになったようです。

斉藤正編「童戯の古典」によると、「ずぐり」での遊びはこの他に『長い木綿のひもと小さなすり鉢ずぐりを用意する。まず「ずぐり」のタッコのくぼんだ所にひもを１回巻き、右手でひねりを与えてからひもに下げ、左右両手で上下にたぐるように上げ下げする。そして上がってきたところをひもにかけ幾度もやる。「ずぐり」はひもを上ったり下ったり回りながら、それでもひもを離れない。

熟練した者は、これを動かして大波のように体の前方で左右に揺り動かし、それを左手のひらの上にひらりと受け止めたりする。「ずぐり」はそのまま手のひらの上で勢いよく回り続ける。

また、またぐらをくぐらせたり、手のひらの「ずぐり」を再びひもで受けたり、そのままひもを長くのばして床上におろし、「ずぐり」を止まらせずに回したりする。この遊びには「かけ」「なみ」「また」「てのひら」「すわり」などがあった。』といいます。

独楽回しは全国的に男子の代表的な遊びの一つでした。

ずぐり回し大会

黒石ではずぐりの保存・普及を図ることから、昭和６２年に黒石郵便局が「黒石ずぐり回し大会」を２月に最初開催していましたが、その後黒石商工会議所が主催するようになり、大会の名称を「全国ずぐり回し選手権大会」に変更し、毎年開催していますが、今では雪国の冬を楽しむイベントの一つとして定着し、昨年は丁度３０回の節目を迎えました。

（ずぐり回し大会）

大会は、認定子ども園・幼稚園・保育園（年長組）の部、６年の部、中学・高校生の部、一般の部、ペアの部など各競技部門ごとに自慢の腕を競い合い、子どもから８０代まで、市内外から１５０人を超える参加者で賑わい寒い冬の黒石市が熱くなります。

「ずぐり回しキョ～ソ～、イチ、ニ、サン」の掛け声に合わせた熱戦が繰り広げられ回転時間を競い合い、これまでの記録は５分０５秒が最長回転時間です。

「ずぐり回し大会」を行っているのは黒石市だけでなく、青森県立郷土館では毎年冬休みのイベントとして、小・中学生を対象に「冬休みづぐりまわし大会」を開催しており、初心者でも職員が指導してくれるので、安心して参加できるそうです。青森県内はほとんどが津軽のコマは「ずぐり」の名称を使っていますが、郷土館での大会では「づぐり」を使用しています。また、弘前市の自得小学校では１月に全校児童８５人が、冬休み授業を活用し、手作りの「ずぐり」を、１～３年生は手で回す「ずぐり」、４～６年生はひもで回す「ずぐり」を回転時間の長さで学年ごとのチャンピオン戦を行っているほか、津軽地方の各地域において、幼稚園大会、子ども大会、世代間交流大会や地区大会など現在も盛んに行われています。

教材

津軽の木製こま「ずぐり」が２０１５年から光村図書が出版した、小学校 3 年生用国語の教科書に、「ずぐりは雪の上で回して楽しむこまです。ふつうのこまは心ぼうが細いので、雪の上で回すことができません。一方ずぐりは、雪の上で回して遊ぶことができるように、心ぼうの先が太く、丸く作られているのです。・・・・・・・・」と、「ずぐり」の特徴と遊び方を写真入りで紹介されています。

この教科書にのるきっかけは「全国独楽回しの会」の安藤正樹会長が著した世界中のこまを紹介している本が、光村図書の出版担当者の目に留まり、教材として取り上げられることになりました。また、副会長の谷伸行さんは、ずぐり回し大会に参加するため頻繁に黒石へ足を運んだことから黒石観光大使を務め、光村図書への働きかけや、六本木ヒルズの正月イベントに黒石の「ずぐり」を参加させるなど、全国へ向けた普及活動を行っており、黒石市民の一人として「感謝」の一言です。

光村社の国語の教科書は、全国の約６割の小学校で使用しておりますので、その効果がすぐ現れ全国から「ずぐり」の注文が寄せられるようになったそうです。これを機に、全国の子供たちが「ずぐり」を手にとって、楽しさを実感していただき、今後さらなる普及活動と共に、古き良き伝統工芸品が多くの人々に引き継がれ、より一層全国民に愛される「ずぐり」になることを願っています。

（光村図書の小学校３年生用教科書「国語三　上　わかば」）

嫁ぐ「ずぐり」への思い　（Q＆A）

「ずぐり」を作る工人さん達が、どのような想いで作っているのか、次のようなアンケートを行いました。

Q1.　「ずぐり」を作るとき一番気をつけていることは何ですか。

A
- 全体のバランスを考えながら、外側の膨らみと、内側の段々を美しく仕上げ、立ちこ(軸)の切り落としまで、そして１本の材料を無駄なく利用すること。
- 木地の仕上げ(形・模様)を丁寧にすること。
- 全体のバランスが良いこと。(木の年輪によって、重さのバランスが悪くなるが、バランスの採れた形のものは良く回る)
- 立ちこ(軸)の部分で回り方が左右されるので、角度や丸みが絶妙な形になるように気をつけている。
- 木材の質の良さ、形の良さ、立ちこ(軸)の角度に気を付けている。
- 立ちこ(軸)のくびれ、大きさ、「ずぐり」の大きさに対するバランス。
- 完全に乾燥したイタヤの材料の確保。(目が細かく重いと回転が良い)

Q2.　「ずぐり」を作るときどのようなイメージで作っていますか。

A
- 美しく作り上げること。
- 長く回ることをイメージして作る。
- 立ちこ(軸)が雪の上でもスムーズに回ることを考えて、平すぎず、とがりすぎず、滑らかに回るようにイメージしている。
- 初心者でも回しやすいように、長い時間良く回るように心がけている。普段使用しないときは飾ってもらえるような綺麗な仕上がりにも気をつけている。

・　自分の作った「ずぐり」を回す人の姿をイメージして作る。
・　良く回る「ずぐり」を作りたい。
・　形もそうだが、彩色を考えながら作っている。

Q3.　「ずぐり」に関して一番思い出に残っていることは何ですか。

A　・　冬は毎日作りました。早くそして材料を無駄にせず、数多く作ることで、技術が身につくと思い、寒さに耐えて必死で作ったこと。
・　初めての実演で緊張してうまく作れなかった。
・　みちのくこけし祭りで、「ずぐり」をヒントにした木地玩具の部で入賞したこと。
・　ずぐり回し大会のチャンピオンの高井さんが、阿保六知秀さんの作った大きな「ずぐり」を大会の時、回してみせると大きな歓声が上がったこと。
・　２０１８年、東京六本木ヒルズの正月イベントに「ずぐり製作実演」として声を掛けて頂き、行って来たが教科書の効果もあり、県外の方々に沢山注文いただき喜んで頂いたこと。
・　修行中の時、初めて５寸くらいの「ずぐり」を作った事。
・　「ずぐり」を回して遊んでいる姿。
・　自分に合った道具作りの開発に苦労したなあ。

Q4.　「ずぐり」を作って一番嬉しかったことは何ですか。

A　・　自分が作った「ずぐり」をお客さんが買ってくれること。
・　買ってもらった人から、後に、「良く回るずぐりだ」と言われたこと。
・　何度か新聞やテレビ等で取り上げて頂いた事もあり、わざわざ実演を観に来てくれる人や、「ずぐり買ったよ」、「よく回るね」、「家でも遊んでいるよ」などと声をかけて下さったとき。
・　自分が作った「ずぐり」が大会で優勝した事。

・　ケンカコマで他のコマに勝ったとき。
・　買ってくれた子供たちが「ずぐり」を回して喜んでいる姿を見るとき。

Q5.　津軽の「ずぐり」から、全国的な「ずぐり」にするには、どのようなことが必要ですか。

A　・　まず、今以上に地元の子供達が楽しめること。
・　ずぐり回し大会の全国へのアピール、小学校などへの回し方の普及活動。
・　地元ではメジャーですが、全国では知名度はまだまだだと思う。何かのきっかけで全国放送のテレビや新聞等に取り上げられることで注目の幅が広まると思う。(PR 活動)
・　年中「ずぐり」を作って、いつでも買える在庫を置いておくこと。
・　ずぐり回し大会を県内、全国レベルの大会にするため「ずぐり」の普及活動が必要。
・　「ずぐり」だけでなく、木工玩具をもっと全国へＰＲするだけでなく、世界へ向けて発信すべき。
・　ずぐりの普及を図るため、こけし館でずぐりの絵付けをやったら良いと思う。

Q6.　その他感じていることは。

A　・　弟子入りしたとき初めて「ずぐり」を知り、教えられたとおり作ること。
・　現在は「ずぐり」の注文がほとんどないので作っていないが、「ずぐり」を作るとき、内側を掘る、段をつける、外側のカーブ、くびれ、切り落とすなどの技術が必要で、「こけし」を作るより先に教えられた。師匠に感謝している。
・　「ずぐり」は大人も子どもも熱くなれる、津軽の宝だと思う。

「ずぐり」を作る人、「縄」を作る人達がだんだんいなくなると、「ずぐり」は消えてしまうかも知れない。

- 製作を始めてまだ数年だが、自分が作ることで沢山の方の手に渡って喜ばれている事を実感している。最近ではおじいちゃん・おばあちゃんと一緒に子どもさん、お孫さんが買いに来られるのも多くなった。私の個人的な思いですが、結局は「こま」は「おもちゃ」なので買いやすい値段で、多くの方に回して遊んで頂けたらと考えている。
- 「ずぐり」の縄が手に入りにくいので、縄を綯う人がいればいい。「ずぐり」の大きさに合った縄が必要なのでそれらに対応できる人がほしい。
- 「ずぐり」を買ったら縄と、遊び方の説明書を付けて売ったらどうか。
- 丸木で芯のある材料の確保。
- 今後ともより一層技術向上に努めたい。

武士の商法

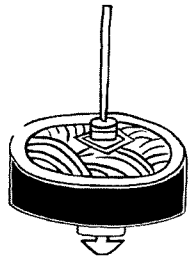
黒石の「一文銭ずぐり」について触れたいと思います。この一文銭ずぐりは尾崎武四郎「新釈青森県史後編」「黒石藩百年史」からとし、次のように記載されていました。

『・・・・黒石藩の前町に、川村という年とった足軽夫婦が住んでいましたが、だまっていても蓄えが減るばかりなので、年寄りに向く仕事が無いものかと二人で相談した結果、思いついたのは子供相手の小商いが一番手軽でよかろうということになって、一文銭に矢竹の心棒を通して独楽を作ることにした。

矢竹は近所の神明宮の崖に行けば無尽蔵にあるので、独楽を作るに便利だから、老人向きの商売としては格好であった。川村老人が早速独楽を売り出すと、羽が生えたようによく売れた。川村夫婦が夜なべをして作っても続かないほどである。ところが、数日後に二人が銭を勘定してみると一文の儲けもなかった。どうしたわけだろうかと、夫婦が頭を並べて考えてみたら、一文銭に竹の心棒を通して一文で売っていたので、儲けが無いことがわかった。

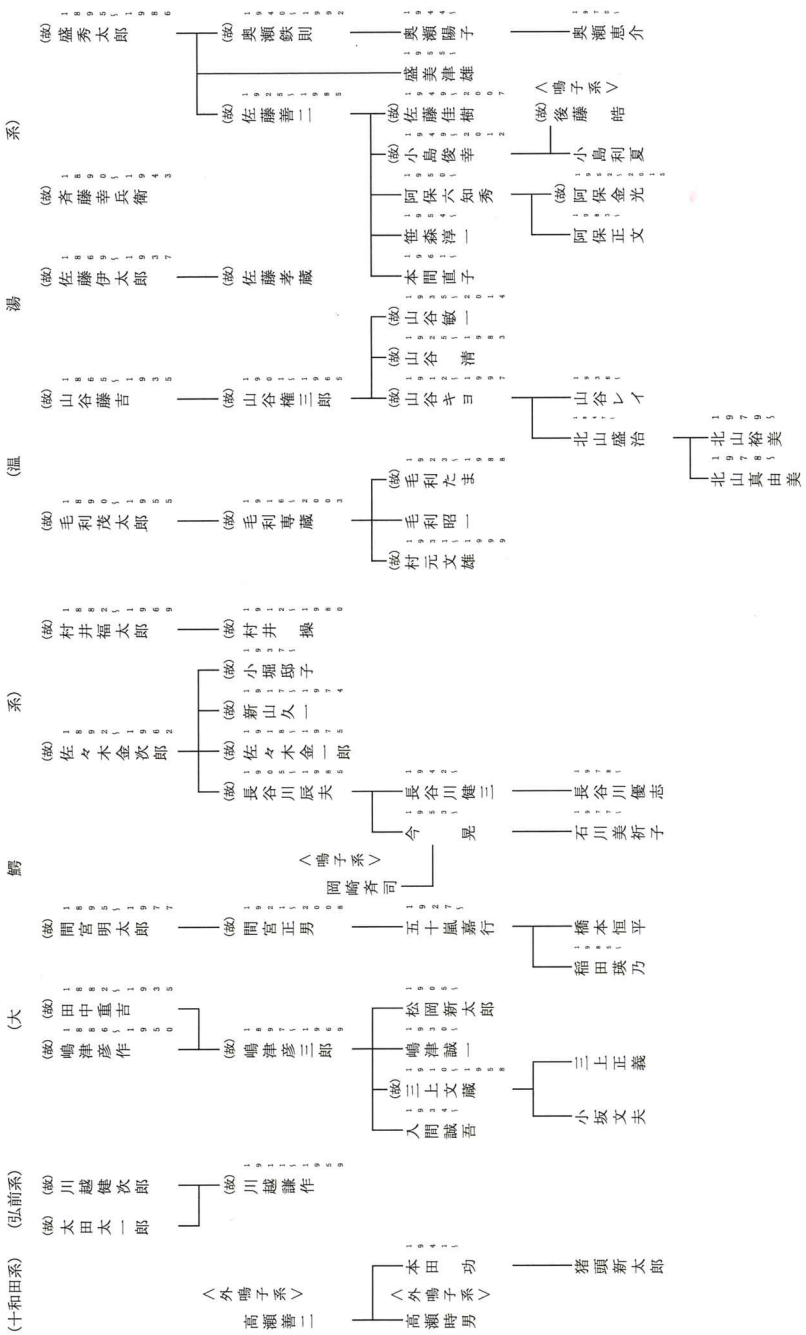
しかし、押すな押すなの商売繁盛を、身を持って体験した川村老人、すこしの悲観の色もなく、「ばさま、ばさま、小商いじものア損コしてもおもしろいもんだなア」と言ったという。川村老人は、武士の商法の代表的な士族であった。』

これは明治四年頃の廃藩置県直後に起こった武士の暮らしの一コマですが、川村夫婦のとぼけた味は、時が経った今でも心和む、ほのぼのとした古きよき光景です。



（一文銭ずぐり）

津軽系こけし工人系図



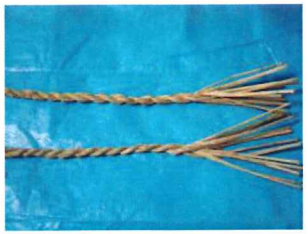
2018年11月現在

縄の綯(な)い方

1.　左綯い

2つのワラの束を同時に捻(ね)り、捻りと逆方向に絡み合わせると、捻りが戻ろうとする力で、2つのワラの束はしっかりと絡み合い、縄になる。

「ずぐり」に用いる縄は右綯いにすると「ずぐり」を回すとほどけるので左綯いにします。時計回りに綯うことを「左綯い」という。ただし、手前を起点として奥に向って綯う場合、時計回りに綯うと、縄目は左上がりになる。反時計回りに綯うことを「右綯い」という。



(上左綯い、下右綯い)

縄の太さや長さは「ずぐり」の大きさに合わせて綯うが、先端に行くに従って細くしていく。

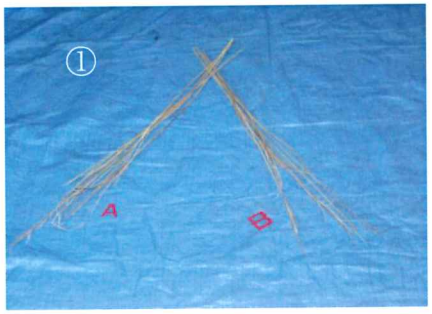
2.　ワラ打ち

① 葉鞘(ようしょう)やワラ屑などを取り除き、葉っぱの基のところが鞘になっていて茎を包んでいます。葉鞘はイネ科の植物の特徴です。この部分は柔らかく弱く、きれいにできないので取り除きます。

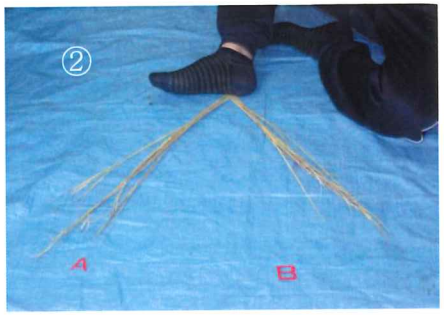
② 乾燥しているワラは硬くて加工しにくいので、霧吹きで湿り気をえると良い。

③ 縄を綯うワラは木槌で打って、柔らかくすると綯いやすくなると同時に、できた縄がしなやかで強くなり、使いやすくなる。

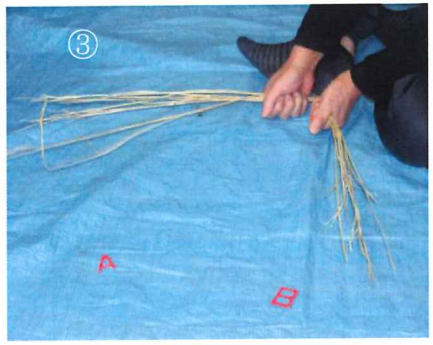
3．　綯う手順



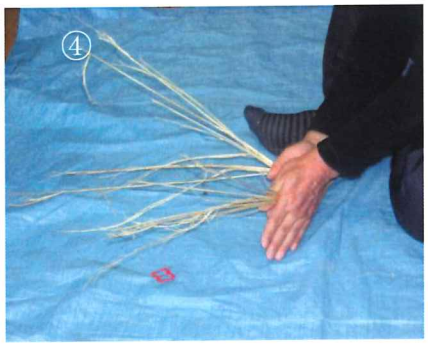
① 同じ太さのワラ束を２つ作り根元から３０cmくらいのところで、左右の束を交差させ、ワラはシベを取り除き、下端に節があるときは折り取って元を細くしておく。



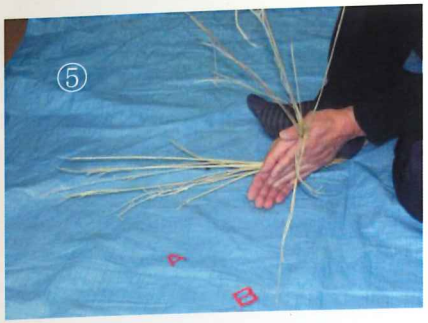
② 交差させた２つの束の元を重ねて、足で押さえる。



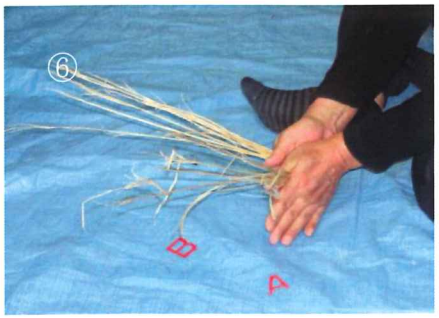
③ 右手でAのワラ束をつかみ、左手はワラ束Bをつかみ、ワラ束が混じらないようにする。



④ 手のひら同士をしっかり押しつけて、左手を前方に押し出し捻りをかける。この時ＡＢのワラは同じように捻る。

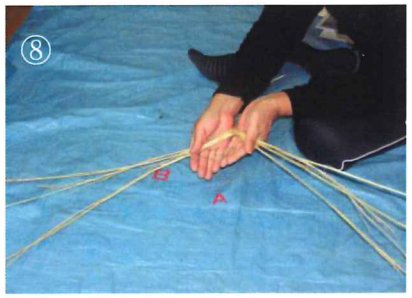


⑤ 手のひらを擦り合せて自然に左手で先のワラを、右手で手前のワラをつかみ、左手の束を手前にもってきて手のひらで挟み捻りをかける。



⑥ ワラが細くなり始めるところで足しワラの準備をする。

⑦ ワラの先まで綯ったら新しいワラを接足しする。足しワラを重ね合わせ、２つのワラ束の長さが違う時は、別々にずらして足しワラを調整する。



⑧ この工程を繰り返し、必要な長さになるまでワラを足しながら綯う。綯っている途中に時々縄を捻り戻して絡みを強くする。

⑨　丁度よい長さになったら、ほどけないように根元と先端は結ぶ。

⑩　足しワラなどがはみ出した部分はハサミで切り取る。

⑪　綯い終えた縄は、強い揉りを与えながら、ワラを擦って磨く。磨くワラは選んだ時に残ったシベを束ね合わせたものを用いる。

⑫　これで縄の完成です。

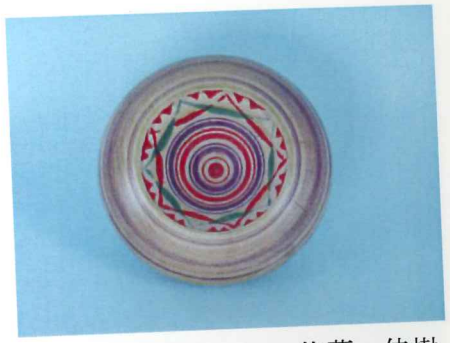
工人別写真

佐々木　金次郎　　（かぶずぐり）

佐藤　善二　　（浅いかぶずぐり）

佐藤　善二　　（すり鉢ずぐり）

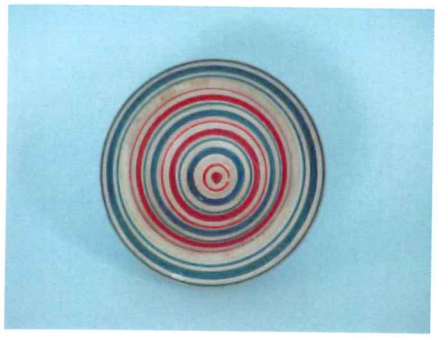
佐藤　佳樹　　（皿ずぐり）



佐藤　佳樹　　（かぶずぐり）

小島　利夏　　（皿ずぐり）

小島　利夏　　（かぶずぐり）



小島　俊摯　　（すり鉢ずぐり）

嶋津　誠一　　（豆ずぐり）

嶋津　誠一　　（かぶずぐり）

嶋津　誠一　　（二重ずぐり）

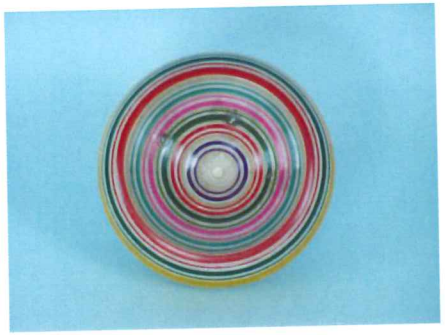
嶋津　誠一　　（三重ずぐり）

盛　秀太郎　　（かぶずぐり）

盛　秀太郎　　（すり鉢ずぐり）

盛　秀太郎　　（二重ずぐり）

盛　美津雄　　（すり鉢ずぐり）



長谷川　優志　　（かぶずぐり）

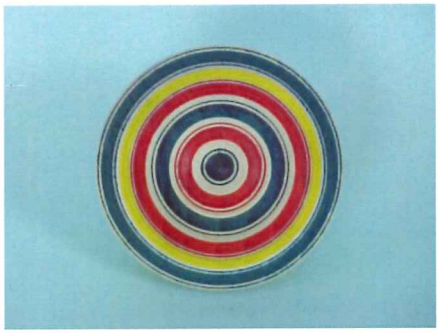
阿保　六知秀　　（二重ずぐり）

阿保　六知秀　　（かぶずぐり）

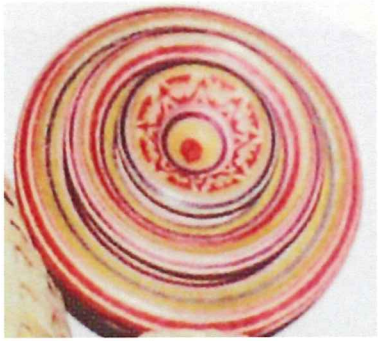
阿保 六知秀　　（すり鉢ずぐり）

本田　功　　（かぶずぐり）

本田　功　　（深いすり鉢ずぐり）



阿保　正文　（皿ずぐり）



奥瀬鉄則　（三重ずぐり）　（すり鉢ずぐり）

笹森　淳一　　（かぶずぐり、台付）

笹森　淳一　　（皿ずぐり）

本間　直子　　（すり鉢ずぐり）

佐々木　金一郎　　（かぶずぐり）

表紙　　版画家　故山口晴温　（1926～2008 年　青森市生まれ）

参考文献等

・「木地師と木形子」　杉本　壽著
・「オモチャ●コ」　　北　彰介著
・「風物誌」立春号　　日本伝統文化振興機構
・津軽こけし工人「盛秀太郎の世界」　　徳井信也著
・「国語　三　上　わかば」　　光村図書
・「日本の木地玩具」編・季刊「銀花」編集部
・「こけしの美」発行者　西谷能雄
・世界百科事典
・フリー百科事典「ウィキペディア」
・コトバンク
・津軽こけし工人他

あとがき

当初安易な考えから「ずぐり」に関する資料づくりの計画を立て、作業に取りかかりましたが、作業が進むにつれ多くの問題と向き合うことになりました。それは裏付けとなる資料が全くと言っていいほど存在しないことから、途中断念することも幾度となく考えました。しかし完璧なものは望めないが、自分にできる範囲で努力し、後は新事実を知っている人が出てくることを期待し、その都度訂正していけばよいとの考えから、一歩一歩、いや半歩づつの前進にも及びませんでした。

この作業を始めてから気付いたのですが、奥瀬鉄則さんの生前の話しを思い出しました。彼の弟子時代は「仕事は教えてもらうものではなく、師匠の背中を見て、盗んで覚えることであった。」という言葉です。

「木地屋魂」というのがあって、そこには厳しい師弟関係が存在し、口で教えたり、書き物で教えることは一切なく、弟子は師匠の仕事を盗み見して覚えるのが唯一の伝承方法でした。弟子は木地の選び方、ロクロの作り方、カンナの作り方、そして木地引きまですべて自分で工夫し、自力で会得していくのが定めだったのです。

盛秀さんが生前中に木地師、こけし、ずぐり、などに関するあらゆることをなぜ聞いておかなかったのだろうと後悔しきりです。いつも「バット」の煙草をくわえ、温厚でにこやかな笑顔が思い出されます。

青森県の伝統工芸品の中で、一定の要件を満たすものを指定する「青森県伝統工芸品」は、県内の伝統工芸品の価値の再評価とその作り手の意識の向上を図ることを目的に平成７年に創設されました。これを受け、平成８年に「温湯こけし」は指定を受けましたが、「ずぐり」の指定を受けていません。大鰐町ではすでに「こけし」と「ずぐり」の両方を青森県の伝統工芸品としての指定を受けています。

国語の教科書で全国に紹介された価値ある「ずぐり」です。黒石市の「ずぐり」は、大鰐町の「ずぐり」と違う特徴がありますので、青森県伝統工芸品の指定を受け、今以上に「ずくり」の楽しさを知ってもらえ

るよう、積極的な普及活動の推進を図り、日本を代表する独楽「ずぐり」として定着することを切に願うところです。

発行にあたり、津軽こけし工人会の方々、さらには取材させていただいた皆様には、ご多忙中にもかかわらず快くご協力頂き感謝申し上げます。

当初の思いからすると、解明できなかったことが多く残りましたが、次の人にバトンを渡すこととします。

改めてお世話になった皆様に謹んで御礼申し上げます。

発刊日　2019年10月1日
発行者　工　藤　　義　繼
〒 036-0364
青森県黒石市山形町121番地